

明石の史跡（67）明石入道



明石入道といえば、当地方はいうまでもなく、おおかたの人々は、『源氏物語』明石の巻に登場する、「明石の君」の父親にあたる「明石入道」を想起されることと思う。ところが、秀吉の時代にも、実は「明石入道」なるものが実在するのである。

天正15年（1587）2月1日より、九州遠征のための先陣が、街道筋を西下する。ここ明石でも、これまでに見たこともないような、おびただしい軍勢が連日にわたり通過。

3月1日、秀吉は、都を出発。陸路を選んでいる（『黒田家譜4』）。秀吉の右筆（ゆうひつ＝書記官）であった、楠長聴（くすのきちょうあん＝正虎）の覚書によれば、翌3月2日、兵庫を出発。須磨まで歩行し、須磨より乗船して、明石に到着。その夜は、明石にて一泊。「手の舞、足の踏所をしらす」というほど、秀吉を歓待したのは、明石入道や高山右近であった（「楠長聴供奉道中宿所覚書」『兵庫県史史料編中世9』339頁）。

歓待の場所は、おそらく船上城であったろう。当時の城主は、高山右近であった。楠長聴のメモによれば、右近の上位に、明石入道という人物が記録されていることである。

明石を名乗っているからには、戦国以来の明石地方の支配者である明石氏の一族であると考えても、差し支えはない。入道とは、仏門にはいること、より具体的には、出家剃髪したものの総称である（中村元著『仏教語大辞典下』）。若年に出家する場合もあるけれども、ここは、秀吉の播磨入国以前から、船上の住人であり、また、この5年後、豊前国内裏の浜において、御座船座礁の責任を問われた、当時、61歳の石井与次兵衛ではなからうか。



船上城近景

日本歴史学会会員 茨木 一成